

お前と俺の 君と私の

さっちゃん☆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

G O D E A T E R 3 クリア記念に描き始めた短編集となります。

ネタバレ沢山あるので、観覧はプレイしてからをおススメします。

女キャラでやってるとユウゴくん夫面やばすぎる。

目次

お前と俺の	君と私の
クリスマス	
5	1

お前と俺の 君と私の

—うん、帰ろう。私たちの明日に

家族（フイム）を取り戻した俺達は、血と砂と涙でぐしゃぐしゃになつた顔で笑いながらゆつくりと歩き出した。

チラリと横目でアイツを見ると、傷だらけの体で愛おしそうにフイムを抱きしめている。

まるで本当の母親みたいだな、なんて口に出してみると「お母さん役長いことやつてたからね」と返ってきて思わず笑ってしまった。

あの牢獄の中に居た俺達がこんな風に笑っていられるなんて誰が想像出来ただろうか。

いつか此処をでて自由に生きるんだと、いつも自分に言い聞かせていたが、心のどこかではどうせ俺達はゴミのように使い潰されて死ぬもんだと思っていた。

だけど、そうはならなかった。何度も死にそうな目にはあつたし、再びペニーウォートの牢獄に逆戻りしそうになつたこともあつたが。その度に周りに皆に助けられて、俺達はついに自由を勝ち取つたんだ。

その事実を受け入れるにはまだ時間が必要ならしく。自由になつたんだという実感が湧かない。

だが、焦る必要は無い。

なぜならもう大灰嵐によるオーティン搭乗者徴兵の心配もなく、グレイプニルに追われる事も無いのだから。

牢獄からの脱走からルルとの出会い。アヌビスのコンテナ襲撃、灰域種との連戦に続き、フェンリル本部奪還作戦のルート開拓。それからひと月程度でフイムの奪還と出来事の連続だつたのだ。そろそろゆつくりしてもいいだろう。

凝り固まつた体をほぐそうと、軽く伸びをして肩をコキコキと鳴らす。そうしていると、フイムを抱いたアイツが「疲れたね」と苦笑いを浮かべる。

「ああ、流石にちよつと疲れちまつた」

「でも、休むのはパーティが終わってからだからね」

「おいおい、今日やるのか？ 明日でもいいだろうに」

主役のフイムはオーディン搭乗の影響で、他の皆はオーディンとの戦闘で体はボロボロだ。

こんな状態でパーティなんてとてもじゃないが出来そうにないだろう。

「ばーていー！ やろ!! ばーていー!ばーていー!」

ところがどっこい。どうやらフイムはまだまだ元気なようだ。これは帰っても寝かしてもらえそうにない。

「だってさ、今日くらいはワガママ聞いてあげよう？」

「わがままー・きいてやれ!」

「そうだけ、今日は生真面目ユーゴはなしだからな!」

フイムを抱いたアイツが困ったように笑い、フイムはそれを聞いて嬉しそうに声を上げる。

ジークはフイムに便乗してパーティコールを始める。

「帰ったらパーティか、これはもうひと頑張りしなければな」

「私も手伝うよ、ルル」

「おじさんの腕の見せ所だねえ」

ジークのパーティコールに気づいたのか、ルルがクレアがりカルドが、皆が俺達の周りに集まってくる。

「おいおい、これじゃ歩きづらいぞ」

皆との距離があまりに近すぎるため、歩幅が狭くなり地味に歩きづらい。

どうしたもんかとアイツの方に目を向けるが、アイツは今の状況で気に入っているらしく、少しだけ口角が上がっている。

これは助けは期待できそうにない。

「ユウゴ、今日は皆と肩を並べて帰りたい気分なんだ」

アイツは余り表情にでないタイプなのだが、今日はその限りではなく。満面の笑みで俺にそう告げた。

何年も見ていなかったアイツの本気の実顔を見て、思わず見惚れてしまった。

俺はどうにもコイツの笑顔に弱いみたいで、直ぐに毒気が抜かれてしまう。そして、コイツが笑ってるならそれでいいか。なんて思ってしまうのだ。

「お前がそう言うならそうすればいいさ」

「うん」

「おかあさんがしたいこと！すればいい！」

「ふふ、フィルムもありがとね」

ヒュウと風が吹き、コイツの髪が俺の鼻をくすぐる。独房にいた頃から、ガキの頃から嗅ぎなれた匂い。

この匂いはいつも俺を安心させてくれる。

「よし、ユーゴのお許しも出たことだし今日は騒ぐぞー!! ポーカー? それともブラックジャックか? くうく楽しみだ!」

「その前に料理を作らないとな、ジークには運ぶのを手伝ってもらうぞ」

「そうね、遊ぶのはその後で」

「わかってるって! その代わりにちよー美味しいの頼むぜ!」

俺はまだ許可出でないだけどなあ:なんて思うが、はしゃいでるジーク達にそんなことを言うつもりもないし、俺自身も今日くらいは眠くなるまでフィルムと遊んでやるのもいいかもしれないと思っっている。

「ジーク、トランプするのはいいが、イカサマは無しだぞ?」

「じーく! ずるしてばっかりだもんね!」

「わーってるよ、フィルムにも言われちまったし正々堂々やるさ」

フィルムからの手紙で少し思うところがあつたのか、少しバツが悪そうな顔をしながら生返事をする。使えるものは使う根性はいいが、こういうなんでもない遊びに持ち込むのは無粋というものだ。

『皆さーん、パーティーの準備は先に始めておきますから、早く帰ってきてくださいね!』

『そうね、早く帰ってらっしゃい、子供達もみんな待ってるわよ』

「了解だイルダ、俺達も帰り次第直ぐに準備に取り掛かる」

歩幅を合わせて皆で歩いていると、通信でエイミーやイルダ、ガキ

どもの騒がしい声が聞こえてきた。

みんなフイムが帰ってくるのが嬉しいのだろう、元気な笑い声が聞こえてくる。

「帰りを待ってくれてる人がいるってのは、いいもんだな」

「そうだね、牢獄にいた頃じゃ考えられない」

アイツと俺は互いに目を合わせてクスリと笑う。

そのままアイツの手を取って、走り出す。

「わっ……！」

急に手を引かれたことによりバランスを崩しかけるがその程度でコケるほどコイツもヤワじゃない。

直ぐに立て直して、俺の速度に合わせて走り出す。

それに気づいたジーク達も慌てたように、着いてくる。

右手から伝わる温かさに幸せを噛み締めながら、明日への1歩を踏み出した。

クリスマス

「みなさーん、今日はクリスマスですよー!」

「クリスマス?」

「なんだそれ、食えんの?」

連日のミツシヨンの疲れを癒すために、太陽が真上に登るまで爆睡していた私とジークは、起き抜けにエイミーからの聞きなれない単語に首を傾げる。

「あ、ジークさんにリインさん! クリスマスとはですね:キリスト様のお誕生日をお祝いする日なんですよ!」

「え、そんなの聞いてないぜ、プレゼントも何も用意できねえぞ」
「私は今ある貯金を崩せば何か買えるかも?」

今日は誰かの誕生日だったのか、最近はフイムの服やカバンを買ったり、神機の強化や整備をってしまったせいで自由に使えるポケットマネーはあまり残っていないのだ。

今、ターミナルに預けている貯金はまだまだあるが、あれはユウゴにこれから先何が起こるか分からないから、金はなるべく貯めておけて言われているものだからあまり使う気は起きない。

だが、誰かの誕生日に何も無いというのは可哀想だろう。私だって誕生日にジークやユウゴから何もなかったら悲しいし、その逆も然りだ。

「ジーク、私の貯金貸してあげるから一緒に何か買おう」

「う:悪いリイン、恩に着るぜ」

ジークがお金がないのは無駄遣いをしているというわけではなく、子供達にお菓子やおもちゃを買ってあげたりしているからである。

そんなジークを責めることなんてできるわけが無い。

それに、この程度の出費なら1度ミツシヨンに行けば取り戻せるし、大丈夫だろう。

ユウゴに怒られるかもしれないのは嫌だが、誕生日に何も用意しない事の方が怒られるはずだ。

だって、私やジークに誕生日の大切さを教えてくれたのはユウゴな

のだから

「あ、あのー…お二人共、別にプレゼントはなくても大丈夫ですよ？」

覚悟を決めた。さあ貯金を引き出そうと意気込んだ私を引き止めたのはエイミーの言葉だった。

何故プレゼントがいらなのだろうか？もしかして誕生日になにか贈り物をするのは私達だけの習慣だったのか？

だとすると子供の頃にユウゴの言った「誕生日は生まれてきてくれてありがとうって意味を込めて贈り物をする日」というのは間違っていたという事だろうか？

「……？」

「なんでだ？」

ジークと私はよく分からない。と互いに目を合わせる。

それに対してエイミーは困ったような顔をみせる。

「えつとですね、キリスト様はですね「キリスト様ってのはとつくの昔に死んでしまつてんのさ」あ、ユウゴさん！」

私とジークが考えこんでいると、今やっている経営の勉強がひと段落ついたのか、本を片手に持ったユウゴがやってきた。

「おいおいユウゴ、それマジかよ!？」

「死んでるのに誕生日祝うの?」

ユウゴの言うことが正しければ、私達は今日死人の誕生日を祝うということになる。

というか死人は祝うというよりは弔うという方が正しいのでは？

まるで分からないのでとりあえずユウゴに聞いてみる。ユウゴは頭がいいし博識だからいつものように私達の疑問に答えてくれるだろう。

「キリストってのは俺達が生まれるずっとずっと前に死んでしまったのさ、気が遠くなりそうな程にな」

「ん?てことは皆会ったことないの?」

「そりゃそうさ、なにせ何千年も前なんだから」

「千年って長すぎね? そんな前の会ったこともない奴の誕生日を

祝うのか？」

おかしな話だ。と再びジークと目を合わせる。

てつきり私はエイミーかイルダ、もしくはリカルドとかの知り合いだと思っていたのだが、そうではないらしい。

そんな私たちを見て、エイミーとユウゴはクスクス笑っている。

なんだかちよつとバカにされてるみたいでムツとしてしまう。

「ユウゴ」

「あー、悪い悪い。バカにしてるわけじゃないんだ。お前らの反応が俺が初めてクリスマスを知った時の反応とまるで同じでな」

「ユウゴさんも『なんで知らねえ奴の誕生日を祝うんだ？』なーんて言ってましたもんね？」

そう言つてユウゴ達はまた笑う。

どうやらバカにされていたわけではないらしい。というかユウゴは私たちをバカにしたことなんて1度もなかったのだからそういうつもりじゃないなんてことはすぐに気づけただろうに。

勘違いでムツとしてしまった自分を少しだけ恥ずかしく感じてしまう。

「とりあえず、プレゼントはいらないってのは分かったけどよ、どうやって祝うんだ？そのキリスト様とやらの誕生日は？　とうに死んじまつてんならおめでどうも言えねえし、何もしてやれねえぞ？」

ジークの言う通りだ。祝うと言われても祝う対象が死んでしまつてるのなら何も出来ない。私達が死者に対して出来ることなんて。その死が無駄にならないように今を全力で生きることと祈ることくらいだ。

「なに、心配するな。ここ百年くらいはキリストの誕生日を祝うなんて名目上だけで、ただ適当に美味しいもの食ったり、遊んだりするだけだからな」

「ふーん、よく分かんないけど祝わなくていいってこと？」

「まあ、そうだな。」

「んだよ、慌てて損したぜ」

ジークはホッと胸をなで下ろす。

「じゃあ、クリスマスって別にいつも通りと変わらないじゃん、なくてもいいんじゃないの？」

ユウゴの説明を聞く限りではクリスマスというものは別になくても大丈夫な気がしてしまう。

美味しいものなら、このクリサンセマムに来てから毎日食べているし、子供たちとだって毎日とはいかないがジークがよく遊んでいる。私もフイムにおねだりされてだっこしたり遊んだりしているのだから、いつもとそう変わらないだろう。

「いえいえ、そうでもないですよ？ 今日はいつもとより豪華な食事になりますし、後で私がケーキを焼きますから」

「ケーキ焼いてくれんのか！ 楽しみだなあ」

「ケーキ…」

前言撤回。やっぱりクリスマスは必要だ。

エイミーが焼いたケーキを食べられるのは大きすぎる。

自らの誕生日をケーキを食べることに利用されるキリスト様には申し訳ないが、今の私にはケーキが必要なのだ。日々の疲れで体が甘いものを欲している。

「あー、後、クリスマスといえば、恋人とか大切な人と一緒に居る日だったりもしますよね！ 皆さんはそういう人はいないんですか？」
顔にはあまり出さないが、ケーキに浮かれていると、エイミーから追加の言葉が飛んできた。

恋人と考えても、私達AGEにはそういうものは無縁だと今まで思っていたから全然考えられない。最近になってAGEも他の人達と同じように扱われるようになってきてはいるが、1部ではまだ差別的なところもあると聞く。

でも、大切な人と言われれば直ぐに思いつく。

これまで一緒にこの地獄を生き抜いてきたユウゴとジーク、そしてキース。

ペニーウオートの牢獄で頑張ろうと思えた子供達の存在。

あの牢獄から私達を助けてくれたイルダ、エイミー、リカルド。
ここで家族になったルル。

普通のゴッドイーターなのに私達AGEの味方になってくれたクレア。

私におかあさんというものを教えてくれたフィルム。色んなところで助けてくれるアインさん。

考えればキリがないくらいに、大切な人達は思い浮かぶ。

こんなに、数え切れないくらいに沢山の大切な人がいるなんて、牢獄にいた頃の私じゃ想像もつかない。

その事があまりに嬉しくて、いつも働いてくれない表情筋が活発に動きだす。

ユウゴもジークも私と同じ気持ちならいいなあ、と思いながら、緩んだ顔で彼らを見る。

「ふふっ…」

うん、やっぱり同じ気持ちだった。二人とも私の方を真っ直ぐ見てくれていた。

また嬉しくなって声を出して笑ってしまった。

私が声を出して笑うなんてここ数年なかったからか、二人ともポカンとしてしまっている。

「恋人とかはよくわかんないけど、大切な人はいっぱいいるよ」

エイミーの言葉に私は正直にそう言った。

「見ればわかります。リンさんは本当にジークさんとユウゴさんを大切に思っているんですね」

「もちろん、大事な家族だもん」

私の言葉にエイミーは嬉しそうに笑ってくれる。

「だから、エイミーのことも同じくらい大切に思ってるんだよ」

「はえ？」

私のこの言葉は予想外だったのか、エイミーは面食らったような顔をして、彼女のあくびする時にも似たちよつと間抜けな声が聞こえた。

「ふふっ、私みんなの所に行ってくるね、また後で」

この嬉しさをみんなにも伝えよう。そう思い立ったらすぐ行動だ。

私は3人に手を振りながら駆け出した。

「あ、それとケーキ楽しみにしてるね」とエレベーターに乗る前に
言って立ち去ったリインを見て、ふう、と一息ついた。

まだ心臓がうるさく鳴っている。顔が熱い。

リインがいる手前冷静を保っていたがもう限界だ。俺は風邪を引
いたように熱くなった顔を右手で覆う。

「アイツ…あれ分かってやってんのかなあ…？」

「分かっているわけないだろ…」

「だよなあ…」

俺とジークはうるさい心臓を落ち着かせるために再びふう、と息を
吐く。

本当にいつものあの無表情からの笑顔は反則だろう。あの顔を俺
以外の男に見せているのかと思うと無性にイラつくし、あんな顔は俺
以外に見せるなど言い聞かせたくなる。

だが、俺にそれを言う権利はない。俺はアイツの相棒であつても恋
人ではないのだから。

「あー…ユウゴ、もう好きって言っちゃえよ」

「それが出来たら苦労はしねえよ…」

ここまでアイツに独占欲を感じているというのに、俺は”好き”と
いうたった2文字の単語が口に出せないでいる。

灰域種と戦う時だつてどうにかしてみせると立ち上がれた。フィ
ムを取り戻すために灰域種を誘導するのは怖くはなかった。グレイ
プニルに敵対することだつて平気だった。

でも、アイツの事になると途端に臆病になつてしまう。今の関係を
変えてしまうのが怖いのだ。だから告白する勇気がでないままでい
る。

それに、アイツは俺が告白しても付き合おうということ自体がなんな
のか分かっていない節がある。

もしアイツが何も分かってないまま承諾したら、それは俺がアイツ
の無知を利用したという事になる。

そんな事したら俺は自分自身を許せなくなつてしまう。

「俺の心の準備が出来るのと、アイツがそういう事に関する知識がついたら…ってとこだな…」

「それ、いつになるか分かんねえぞ?」

今でもなんの躊躇もなく俺達のベッドに入り込んでくるからな、とジークが笑う。

とりあえずはちゃんとそういった意識を持ってもらう為にも、今度ベッドに潜り込もうとしたら注意しようと決意した。